

「巻き込まれ親父の突入」

作 藤次郎政秀

●プロローグ

H Y・T Y・I Yの3人が無事〃特別銃器携帯・使用許可証〃の拳銃・短機関銃・小銃・突撃銃・散弾銃・軽機関銃・擲弾筒の免許を取得して、ようやく碇屋のエージェント派遣部門が営業活動を開始した。

そこに、なぜかT Tも〃特別銃器携帯・使用許可証〃の拳銃・短機関銃・小銃・突撃銃・散弾銃・擲弾筒の免許を取得していた。「なんで？」と訊ねるH GにT Tは「あら…私も持っていた方が准尉のお手伝いができると思って」とシレっと答えた。

H Gは、H Y・T Y・I・T Tを男屋に呼んで

「はい、合格祝い」

と言って、それぞれ名前が書いてある箱を渡した。箱の中身は拳銃…

「それぞれ、個性をイメージしてチョイスした…大切に扱えよ！」

「[[はい]]」

I Yは男屋の工場でH Gから貰った拳銃を取り出してニマニマと微笑んで触っていた。

それをS Kに見られて、ハッとして後ろに隠した。S Kは笑いながら、

「よかったな。お嬢（I Yのニックネーム）…いい拳銃を貰って」

I Yは後ろに隠した拳銃を出して指さし、

「軍曹（S Kのニックネーム）はこれを知っているのですか？」

「それは、H Gのコレクションの一つだよ、奴が大切に持っていた一丁だ。大事に使え」

S Kの言葉にI Yは嬉しくなって、

「ハイツ」

と返事して喜んだものの、ふと疑問が湧いてきて、

「…でも、これが私をイメージしたモノでしょうか？」

「そりや、簡単！排莢口が左にあるからだ」

とSKに指摘され、改めて拳銃の排莢口を見て

「確かに！」

「その拳銃は、某有名アニメの主人公の使用する拳銃と同じメーカーで、その発展・改良型になるんだ」

「そうなんですか？」

IYはその某アニメの主人公が好きで、SKの言葉に目が輝いていた。

「正確に言うと、その発展・改良型の更に改良して小型化したものだよ…あのアニメの主人公が使用する拳銃は一見真上に排莢されるように見えるが、正確にはエクストラクター（排莢する時に莢莢のへこみを引っかける部品）が左に付いていて、右利きが撃つと、下手すると空莢莢が顔面に飛んでくる」

「そうなんですか？」

IYは驚いた。

「おまけに、スライドの上部に別部品のスライドカバーが付いていて、古いモノや不良品はカバーにガタがきていてそれが外れて顔面を直撃する」

「えっ？」

「もう90年も前に作られた拳銃だ…程度の良いモノは骨董価値が付く」

「そうなんですね」

「その不具合を改良して、発展させたのがそれ…」

「それでは、孫になるのですね…」

「そういえば…そうか…」

S Kはカカと笑った。

同時刻、白山亭フロア内…

「あの…准尉」

「なんだ？」

バーカウンターで器具の手入れをしながら、T Tが訊ねる。

「私も拳銃いただきましたが、いいのですか？」

「そりゃ、お前さんも無事、特別銃器携帯・使用許可証を取得したからね。いつ碇屋の手伝いをお願いするか分からねの…」

「ありがとうございます…で、この拳銃やけにコンパクトですが…」

T Tはカウンターの内側の引き出しを開けて、H Gに貰った拳銃を示す。(店内なので、取り出しません。作者注)

「そう言うコンパクトさが、お前さんが持って似合うイメージして選んだ」

「そうなんですか？もっと大きくても良かったと思いますが…」

長身（H Gより少し背が高い）のT Tは残念そうに言う。

「お前さんは、ウチの3人娘（H Y・T Y・I Y）に対して、あの子らのお姉さんのようなバツクアップを期待しているので、滅多に拳銃を抜く必要がないと俺は勝手に思っている」

「まあ…お姉さん…」

T Tは喜ぶ、

「それに、その拳銃他のと違って癖がある」

「何ですか、癖って」

T Tは小首を傾げて聞いた。

「グリップを強く握らないと安全装置が解除されなくて激発できない…それ故に安全と言えば安全なのだけど…しかし、その癖を分かって使えば命中精度は他の拳銃と比べて高い」

H Gは、T Tに渡した拳銃を撃つような手をして言った。

「…だから、私なのですね」

T TはH Gの真意…自分は裏方でいざと言うときの切り札…と理解した。

「そうだよ」

「はい、大切にします」

同時刻、母屋…

「H Y先輩が准尉に貰った拳銃は何ですか？」

とT YがH Yに訊ねる。

「わたしの貰ったのは、正規軍で今使用している拳銃と同型…いや、その改良版？」

「わたしは、見たことのない拳銃なのですが…」

「どれ、見せて」

「こういう拳銃です」

T Yが自分の拳銃の箱を開けると

「あら、綺麗ね」

「白くて目立つのですが…」

「わたしも見ることがない」

「拳銃のフレームに“レディなんか”と刻印がありますね…」

「きつと、女性用だ…いいなあ」

後でH Yがこの件でH Gに聞くと、

「お前さん（H Y）にあげた拳銃は、あの4丁の内、一番軽くて小さい女性用のポリマーフレーム仕様の最新の拳銃なんだけど…」（I Y、T Y、H Yと年齢が若いほど拳銃の製造された年代が古い…（笑）作者注）

と聞いて、H Yは「（わたしのが、最新式なんだ…）」と喜んだ。

「そういえば…みんなにホルスター見繕わないとね…」

「そうですね」

「ただし、お金払ってね…安くするけど」

「エー……！」

「…あと制服作らないとね」

「ホントですか？」

後日、碓屋のエンジニア部門の制服が出来て、白山亭をバックにして写真を撮るが、なぜかT Tもそこに入っていた。

…碓屋の制服は白シャツ、ネクタイ（個人の好み）の上にネービー・ブルーのジャケット（下に特注防弾ベストを着用する場合あり）、下は共布のスカートかスラックス。

H GはH Y・T Y・I YとT Tの4人が『特別銃器携帯・使用許可証』を取得し、各自使用する拳銃を与えたので、ガンスミスの工場で調整して、港町警察署の射撃場に行つての射撃練習、道場での格闘技の稽古。そして、T T以外の3人は、Y 国際港のコンテナ埠頭でコンテナを使ったフォーメーション訓練等を開始した。

H Y以外は、つい最近まで民兵会社の社員であつたので、二人供H Gの指示通りの動きができたが、H Yはブランクがあり、勘を取り戻すのに手間取った。しかし、一旦勘を取り戻すと、他の二人を凌駕した。

H Gは「歳とブランクがあつた割には、意外とH Yの動きと射撃のセンスが良いな…さすが一番にエージェントになる覚悟を決めただけある…」と驚いていた。

● Y 国際港のフェリー埠頭

Y 国際港のフェリー埠頭の岸壁にH GとH Yの二人が居た。

春が近づいてきていたが、二人はコートを着て風よけの無い岸壁で寒風にさらされていた。

「准尉、寒いです！」

低身長のH YはH Gを風除けにしているのに、H Yは首に巻いたマフラーに顔を半分埋めて凍えていた。

「寒いかH Y。予定ではそろそろ港口にフェリーが見えるはずだが…まだ見えんな…一旦待合室に行くか？」

パイプを咥えたH Gは凍えるH Yを心配して言った。

「はい」

この数日前、H Gは親戚の任侠集団葛葉組の親分の商店街会長に呼び出され、人気歌手I Mが地元の海浜アリーナでのツアー公演があり、そのI Mの所属する芸能事務所の社長から商店街会長に、地元ツアー中のI Mの警護ができる会社がないかを相談され、それならばうってつけの会社が地元に来たところで行って、碇屋を紹介してくれた。

H Gとして、碇屋最初のエージェント業務を受けた仕事になる。

H Gは早速H Yを連れて依頼を受けた芸能事務所を訪れた。芸能事務所は帝都のオフィス街の一角に立つビルにある。H GとH Yはビルの一階で受付を済ませると、迎えに来た社長秘書に案内されて最上階の社長室に通された。

社長室の手前に秘書の居るフロアがあり、社長秘書は机の上の内線電話の受話器を取ると、

「社長、碓屋のH G社長と、もうお一方をお連れしました」

と言うと、「ああ…通してちょうだい」と返答があった。

「では、碓屋様こちらへ…」

と言つて、社長秘書が社長室のドアを開けた。

そこは、人が100位入るのではないかと言うフロアに、立派な応接セットや会議机があり、部屋の隅には小さいながらバーカウンター、奥の窓際には大きなデスクと椅子があり、そこには芸能事務所の社長が座っていた。

「(こりゃ…〇県領地の海軍基地の情報課のフロアよりでかいぞ…「巻き込まれ親父の反撃」参照)」と、H Gはフロアを見回して感じた。

「やあ、碓屋さんわざわざのお運びありがとさん。当芸能事務所〇×エージェンシー社長のM Kよ。ヨロシク！」

H Gは軽いノリとトーンの高い声を聞いて「(どこであの親父さん(親戚の商店街会長)とつながるのだろう…?まあ、この業界(芸能界)の事だから、お互いの裏の結びつきかなあ…親父さんも任侠稼業だから…)」と思った。

「始めまして、碓屋社長のH Gと申します。こちらは当社のエージェントでH Yと言います」

「H Yです。よろしく願います」

H Yを見たM Kは、一瞬驚いたが

「ささ、こつちに座って」

と言つて、応接セットを勧めた。

応接セットの前で名刺交換…H Gは手慣れたものだが、H Yはブランクがあるのでギクシャクしていた。

H G 達は応接セットに腰掛けると、

「この度は、弊社のサービスをご利用いただきありがとうございます。本日はご依頼につきまして、お話を聞かせていただけたとの事ですので、お伺いした次第です」

「あつ、その事なんだけどね…実は、大変なことになっちゃって」

社長から依頼理由を訊ねると、人気歌手 I M の芸能事務所に一通の脅迫文が送られてきたとの事。社長からテーブルの上に投げ出された手紙を H G は「ちょっと拝借…」と言って、手に取り開いてみた。それには

『〇月××日××△日に海浜アリーナで行われる I M のコンサートを取りやめろ、でないとコンサート会場を爆破する』

と…

脅迫文を H Y と共に見ている H G に

「そんなこと言われても、もう海浜アリーナの会場スケジュールやゲストアーティストのスケジュールもあるし…何よりも金が…」

M K は頭を抱えて行った。H G はスマートフォンで脅迫文を撮影すると、

「…なるほど、そういう理由ですか。質問があるのですが」

「どうぞ」

「警察に話しました？」

「そんなこと、できるわけないでしょ！警察に話したら、I M のコンサート自体が行えなくなってしまうじゃないか！…それに、週刊誌の記者にこの事で嗅ぎまわられているんで、対応に大変なのよ」

「週刊誌の記者には知られてるんですか？」

「そーなのよ！まだ秘書以外に社内の誰にも話をしていなのに…もう、知られているように」

H Gは「(一体どこから、情報を仕入れてるんだ?)」と思った。

「ところでH Gさん」

M Kが改まって訊ねる。

「何ですか？」

M KがH Yの事を指さして、

「この娘がエージェント？」

「そうですけど…何か？」

「いやあ、こんな美少女にI Mの警護が務まるとはとても思えないわね…だいいち拳銃とか撃てるの？」

と言ってM KはH Yの顔を覗き込む。小柄で童顔のH Yの顔がM Kの『美少女』に反応して笑顔になるが、あまりにM KがH Yをジロジロ見るので、次第に笑顔が引きつっていった。

H Gはそれを見て苦笑した。

「大丈夫ですよ、彼女はウチのナンバー1ですから、I Mさんも若い女性アーティストですから、同性なら良いかと思ひまして…」

と言うと、H Yは喜んだ。H Gは内心舌を出していた。碇屋にはまだ男のエージェントはH Gだけである。

「H Yさん」

「はい？」

「ウチでデビューしない？あんなならアイドルグループに入れるかもよ…」

H YはM Kの誘いに「芸能事務所の社長から直々にスカウトキターーー！」と舞い上がった。それを見てH Gは「オイオイ！年齢を考えろ…」と突っ込みを入れていた。

すっかり舞い上がっているH YにH Gは「(そろそろ…いい加減にしない！)」と思って、

「H Y」

「はい」

「社長はお前が銃器を扱えない華奢な少女だと思っているので、特別銃器携帯・使用許可証を見せてあげて」

「えー」

H YはH Gの言葉に嫌な顔をした。特別銃器携帯・使用許可証には、生年月日が記載されているのでH Yの歳がバレる。H Gが手で催促するので仕方なくH Yはジャケットのポケットからパスケースを取り出し、特別銃器携帯・使用許可証をM Kに見せた。それを見たM

K

「???」

特別銃器携帯・使用許可証は取得年齢制限18歳以上である。なので、M Kの事務所に所属しているアイドル年代でも取得可能であるが、そこには顔写真と生年月日が記載されている。

「…えっ、この娘40代？」

M Kの目が点になった。H Yはすぐに提示した特別銃器携帯・使用許可証をしまい、むくれてH Gを睨む。

「ですので、ウチのナンバー1が御社のI Mさんを海浜アリーナで行われるコンサート期間中しっかりと警護させていただきます」

とシレつと言った。それを聞いて「(ナンバー1って、ひょっとして一番年長者って事!)」とH Yは勘ぐった。

H GはM Kと依頼内容の確認と、料金について話をし、契約を交わした。

H GはH Yと共に、M Kの秘書からI Mのコンサートツアーの詳細なスケジュール等を

入手した。

芸能事務所を後にして、H YはH G対して

「なにも、わたしの年齢バラす事無いじゃないですか！」

と言って、H Yはむくれていた。

「ハハハ、アドルデビューできなくて残念だったね」

その途端、H YはH Gの足を思いっきり踏んづけた。

その晩、I Mのコンサートツアーの詳細なスケジュールをH Yと確認していて、

「I Mさんのコンサートツアーって、海浜アリーナの前は、F県領地のコンサートホールでやるんですね…その間の移動はフェリーを使うんだ」

とH Yが言ったので、H Gは「(あれ?)」と思った。

H Gはこの前日に2通のメールを受けていた。一つはO J、もう一つはY M…O JはF県領地の事件で知り合ったF県領地の対岸にあるO県領地の海軍基地の情報課少尉、Y MはH Gの大学時代の後輩で現在は以前H Gの居た民兵会社D KのF県領地の支部の支部長。

共に内容は要約すると『近く帝都に行く用事があるので、H Gの店(白山亭)の開店をお祝いに行きます』と…それを思い出してH Gは「(何かあるな)」と嫌な予感がした。

H GはH Yを見て、

「お前さん…いや、碇屋エージェント派遣の初仕事だ、頼むぞ! H Y」

「ハイ!」

● I F登場!

あまりの寒さに待合室に行く事にしたH GとH Y。二人歩いている脇を見慣れたトラックが後ろから通過する。

H G達の約50メートル先に止まったトラックに書いてある社名にH GとH Yはギクッとなった。トラックからバラバラと降りてくる戦闘服を来た見慣れた集団…そして、更にトラックの助手席から降りてくる人物を見て、

「…なんでこんなところにF子ちゃんがぁー」

「うっわーI F隊長！」

とそれぞれ、叫んで二人とも渋い顔をした。そして、お互い顔を見合わせて

「H Y…見なかったことにしよう…」

「そっ、そうですね准尉」

二人ともコートに顔をうずめるようにして、わざわざトラックを遠回りに避けていくように待合室に歩いて行った。

「あら…H G！」

I FがH G達を見つけて声をかけると、H Gは「(よりによって、一番嫌な相手に見つかった!)」H GとH Yは足早に立ち去ろうとしたが、

「こらっ、待ちなさい！」

I Fがまた節操もなく腰の拳銃を抜きそうな雰囲気になったので、仕方なく

「あゝら、F子ちゃん…久しぶりー」

と白々しく某テレビのアニメ番組の主人公調に言う

「F子ちゃん言うなっていつてるでしょ！」

I FはH G達に遠慮なく近づき、H Gの陰に隠れているH Yを見つけて、

「なに、あんたたち港でデート？」

と言つて、H GとH Yを交互に見る。

「うるへえー、仕事だ」

「あら奇遇ねえ…あたしも仕事」

H Gが言い返すと、I Fは自分を指さし言った。

「なんの？そんな戦闘服着て…物騒な！」

H Gが訝し気に聞くと、

「あたし達がF県領地で捕獲した『狸と貉』の護送任務」

「へっ？あの『狸と貉』の？あいつらこつち来るの？」

「もうじき到着予定のフェリーでね」

と言つて、I FはH Gにウィンクした。それを聞いてH GとH Yはゲンナリした。

「なに、ゲンナリしてんのよ！」

「そりや、あの『狸と貉』」 だろ…F子ちゃんもお気の毒様」

H Gはゲンナリした理由がI Fのウィンクにもある事を黙っていた。

「なによ！」

説明しよう！（作者）…この先程から会話に出てくる『狸と貉』とは、昨年F県領地で起こった核施設乗っ取り、ならびに同施設にある核燃料再処理施設からMOX燃料を奪い、そのプルトニウムを使って核兵器を作ろうとした隣国C国の反政府組織の一人である大使と、大使にそそのかされ、自分の息のかかったF県領地の正規陸軍と警察を動員して、F県領地を閉鎖したF県領地の有力者で皇国の外務大臣の事。その首謀者二人を捕らえたのは、ここに居るI FとH G達で、捕らえるときの作戦で使用していた大臣と大使の事を『狸と貉』と言うコードネーム（悪口）で呼んでいたため（「巻き込まれ親父の反撃」参照）である。

「え？ I F 隊長…あの『狸と貉』ホントにフェリーでやってくるの？」

H Y も I F に訊ねる。

「そうよ、何度も言わせんな！」

I F がキレ気味に言うと、

「うわー」

H G はやな予感が頭を横切り、頭を抱えた。

「どうしたの？」

「あのフェリーには人気歌手の I M さんが乗船してんだよー。俺達はその I M さんを警護する仕事を受けてここに居るんだ」

「エッ、I M？ あたしもファンなのー、後でサイン貰っておいてね！」

と I F は H G 達の心配をよそに、能天気な返事をした。

●フェリーは来たものの

H G 達が I F と話をしている時、Y 国際港入り口にフェリーが見えた。しかし、フェリーは港入り口で停船し、港内に入ろうとしない。

港湾局の信号灯の表示は「I（進入船有）」になっていた。

フェリーの接岸を補助するタグボートも傍にいるが、一向に近づこうとしない。

フェリーが湾口に停止してから20分程：

「なんかおかしい…」

I F と H G、H Y はフェリーの動きを不審に思った。

一向にフェリーが港内に入ってこないの、H G はスマートフォンを取り出すと、水先案

内人やタグボートを手配している Y 国際港港湾局に電話した。

港湾局の情報から、フェリーは航行中に乗っ取りにあった信号が発せられ、また湾外でフェリーに水先案内人を乗せないの、乗っ取りを確定して港町水上警察署に連絡しているとの事…この情報は、普段から港湾関係者と懇意にしているHGだから知りえる情報である。

HGはそれを聞いて「げえ…！やな予感、これだったか…」と渋い顔をした。

それを、隣で盗み聞きしていた、IFの顔色が変わった。HGはIFに訊ねる。

「F子ちゃんの方では、何か聞いてないの？」

「…なにも」

と言って、IFはそっぽを向いた。

HGは相変わらず、民兵会社の日和見保身内密主義の上層部が、この情報自体をまだ知らないか、知っていて握り潰しているのかどちらかであろうと安易に想像した。

「相変わらずだねえ…あいつら（民兵会社の日和見保身内密主義の上層部の事）は、F子ちゃんも大変だねえー」

と吐いて捨てるように言った。

「あの『狸と貉』が居るんじや、乗っ取り犯は多分C国の兵士…多分特殊部隊かなあ…それも反政府組織の」

HGはIFの首に掛かっている双眼鏡をIF毎引き寄せて覗き言った。

「いたた…なにすんの！」

HGに引つ張られ、HGに顔を寄せるような体制になったIFが文句を言う。

「本来は、特殊部隊が沖で潜水艦からフェリーに乗り移り、『狸と貉』を回収して、潜水艦に乗せて…いや、この場合『貉（大使）』だけか…C国に脱出する計画だと思うけど、フェリーの乗員に侵入された事がバレて、乗っ取りにあった旨の信号を発信され、特殊部隊を回

収する潜水艦が、多分また海軍に発見され、沖で追い回されているだろうよ…。フェリー自体は、外洋船ではあるが基本沿岸を進む航路をとるので、フェリーを乗っ取った方がいいが、迎えの潜水艦が来ないとなると、フェリーにヘリポートはないので、ヘリを着けることもできず…フェリーは最近の人材不足と技術力の向上で衛星による位置情報と沿岸に設けられた電波灯台によって、自動航法の技術が進み、人は非常時の判断と湾内進入から接岸の操作だけ…乗っ取り犯も最悪フェリーで本国に帰れる可能性が残されているので、破壊はできない。ただ、湾内に入って接岸するにはパイロット（水先案内人…湾内侵入から接岸までの操艦やタグボート、完璧の港湾職員に対する指示を一括して行います。作者注）はいるよなあ…パイロットを乗せた艇が近づいてもトラップを降ろさなかったので、乗っ取りが確定したか…多分、フェリーの船長は乗っ取り犯がブリッジに來た時点で自動操艦の機能を解除できないようにしたのではないかな？ハハハ、我が国の技術力は、世界一！…もともと、この場合港湾局から無線コントロールで接岸出来ればなおよかったのに…」

とIFにわざと聞こえるように言って、HGは高笑いをした。

そんなとき、地元の港町水上警察署の車両多数がフェリー埠頭に乗り込んできた。

続いて、マスコミ各社取材陣が押し寄せてきて、警察官とマスコミの取材陣とひと悶着があった。

それを見ていたHGは

「つたく、マスコミは一体どこから、情報を仕入れてるんだ？」

と呆れてボソリと言った。

HGのスマートフォンに着信音が鳴った。

「はい、碇屋です。…はい、お世話になっております。ハイハイ…はい？あつ、今フェリー

埠頭に来ていますが、この度は…はい、まあ…大変なことになっていますなあ…ええ、弊社は御社のIMさんの警護は、フェリーを降りてからですよね？…エッ？いやいやいや、船に乗っていて出てこなければ弊社としてもどうしようもありませんので…。エッ？そんなこと言われましても、弊社はエージェント派遣の会社ですから…軍隊では、ましてや特殊部隊ではありませんので…」

HGはスマートフォンを持って、ペコペコ頭を下げながら対応していた。通話が終わると、
「…どうも、芸能事務所は我々をなにかと勘違いをしている。映画か漫画の見過ぎだよ…
『船に乗り込んで救出しろ！』だなんて」

HYに向かって苦笑すると、

「と、言うことで、HY引き明けだ」

「はあい」

とHYがふてくされた返事をしたとき、HGの右隣に居たIFがいきなり、銃を抜いて、HGのこめかみに突き付けた。

●恒例、夫婦漫才…今回は命がけ！

「…F子ちゃん、なんのマネかなあ…？」

HGは「(またかよ！」「巻き込まれ親父の撤退」と「巻き込まれ親父の反撃」参照)」と思
いながら、銃を突き付けたIFを横目で睨んだ…IFは銃の引き金に指をかけていないこ
とを確認し、同時にコートのポケットの中の銃を抜こうとしたHYの腕を左手で掴んだ。

「勝手に帰るな！」

「F子ちゃん、今日はお互い居合わせた場所は同じでもお仕事が違うでしょ！」
と言いながら、HYの腕を強く握った。HYがHGを見上げて、HGがHYの方の目でウイ
ンクしているのを見て、コートの中の銃を離し、ポケットから手を出してHGが緩めた手を

握った。それを感じて「(いい子だ、HY)」と思って、HYの手を握り返した。

次の瞬間HGは右手でIFの銃を下から掌底で突き上げ、銃口を上に向けた。HYの手を握っている腕は、HYの腕を下に引つ張る。慌てたHYは前に転倒した。驚くIFのスキを見てHYの手を握っていた手を離してIFの脇腹肉を掴む。

「また、肉ついたねえ…F子ちゃん」

と言いながらIFの脇腹肉をプニプニと掴む。IFは真っ赤になり、

「なにすんねん」

と国訛りを出して、HGの脇腹肉を掴んでいる手を引きはがして、後ずさりした。

「(やつぱり…こつちの方が弱かったか…「巻き込まれ親父の反撃」参照)」と、HGは以前抱き寄せて肘鉄を食らったので、今回は戦法を変えた。IFの銃は、案の定安全装置がかかっていた。

「手伝え！」

「いくら出す？」

「…金はない！」

より一層顔を赤らめて言い放つIFに

「じゃ、契約は成立しないねえ…こちらは営利目的の会社なのでね。じゃあね。HY帰って作戦会議だ」

と言って、無言で起き上がって頷くHYの肩に手を回して、踵を返すと。HGの耳にはIFが銃の安全装置を外す音が聞こえた。

HGは振り向いて睨みつけると、銃を構えたIFの本氣の目が見えた。HYは、ポケットの中に手を戻していたので、多分銃を握っていると思い、HYを自分の後ろに庇うように隠して

「おいおい、なんのマネだい！F子ちゃん」

と言うと

「今度は本気よ。待ちなさい！」

銃口の狙いは、明らかにHGについていた。HGの陰に隠れたHYはポケットから銃を抜き、「撃ちますか？」とHGに囁いた。HYもエージェントになったなあ…と自分が撃たれるともしれない状況で、HGはHYの成長を頼もしく思った。

このやり取りの始終は、IFの部下も見えていたが、自動小銃を構えはすれ、真剣にHGに狙いを付けた者はいなかった。この時のIFの部下達の多くは、以前F県領地の対岸のO県領地での二人の事を見ているで、「(一)また、夫婦漫才か！」「巻き込まれ親父の反撃」参照(二)と言う体をしていたが、夫婦漫才にしては珍しく真剣にIFが銃を構えているので、どうすべきかうろたえた。だした。

…こんな命がけの夫婦漫才もないものである…HYも、HGが帰ると言い出したので、自分が突っ込む必要がないと感じたが、今の状態は、夫婦漫才を通り越して夫婦喧嘩である…いや、HGとIFは夫婦にもなっていないのだけ…(作者)

●お腹の子に罪は…じゃなくて、めんどくせー

「あの船にはYMが乗ってるのよ！」

とIFは言った。それを聞いてHG

「なんだとおー」

と驚いた。HGの大学時代の後輩で、今はIFが居る民兵会社DKのF県領地の支部長をしているYM…それがフェリーに乗船していると言う…

「それを早く言え！」

H Gはふと数日前のO J少尉とY Mのメールの事を思い出していた。「(これか…)」

「Y Mの任務はF 県領地から『狸と貉』の護送任務か！ 答えるI F！！」

H Gは真剣になって怒鳴った。I Fは「(後輩のY Mには真剣になるのね…あたしがY Mの立場だったら、真剣になってくれるかしら…)」と嫉妬した。

「そ、そうよ！」

I Fが吐き捨てるように言うと、H Gは頭を振り、

「どーすんだ…これじゃ、フェリーを城に見立てた籠城戦だぞ！ 突入でもするつもりかい！！」

とH GはY Mの事が心配で珍しく頭に血が上りI Fを恫喝すると、I Fはひるんだ…これで、夫婦喧嘩(笑)に水を差す状況になった。それを見ていたH Y「わたしがY M支部長の様になったら、こんなに真剣になってくれるかな？」と思った。

「(うわー)」と思ったH Gは

「わかった！ 協力してやる！ めんどくせー」

と言って、大きなため息をつくと、I Fに対して静かに

「F子ちゃん、お互い頭を冷やそうぜ…近くにいい店知っているから、一緒に来ない？」

I Fは部下の一人にここに残して、何かあったら連絡するようにと命令し、残りの部下達とH Gの後について行った。

● 白山亭2階

港から離れたY 国際港駅商店街…ここに、『白山亭』はある。昔港は駅のすぐ近くにあり、駅から港に向かって商店街が作られ、商店街は栈橋と駅を往来する客で賑わっていたが、港の水深が浅くて時代を経るにつれ大型化する船舶が栈橋につけなくなった。仕方なく、湾内

の再開発で、港の栈橋が駅から湾内に向かって離れてしまい、今では、波止場の栈橋から駅までバスが往来するまでになった。そのため、駅前の商店街の賑わいは廃れていた。

その白山亭の二階で、H G達とI FはI Fの部下を交えて作戦会議をしていた。

「いい店って、お前の店かい！…それから、なんでT Tがここに居る？」

憤慨するI Fに対して、T Tが黙ってコーヒーを給仕する。

「そうだよー、飲食代は後で会社（I Fの居る民兵会社）に請求書送るからねー、それとT Tはウチの従業員だからねー」

とH Gはシレっと言った。

「んだと！この不味いコーヒー、金執るんかい！」

とまだ飲んでも居ないコーヒーに憤るI F。既に出されたコーヒーを口に含んだI Fの部下の一部は吹き出した。そんな光景を全く意に介さないH Gは、

「さあてと…最初から被害者面して、大臣の謀反に仕立て上げて関係ないと言い張ればいいのに…そうしたら、外交官特権で国に帰れるかもしれないのにねえ…馬鹿な貉（大使）だ」

「それを暴いたのは、私達でしょうが！」

と食って掛かるI Fに

「…そうだった！！」

H Gはカカと笑った。

店内のテレビでは既にフェリー乗っ取り事件を生中継で報じていて、そのフェリーに人気歌手I Mが乗船している事から、各社チャーターした取材のヘリが飛び回っていた。取材ヘリの爆音は木造3階建ての白山亭の中にも響いていた。

「うるせーな」

H Gはヘリについて悪態をついた。

また、テレビでは、人質奪還のために帝都から最近設立された帝都特殊急襲部隊T S A Tの派遣について検討しているとの報道があった。

その時、I Fの部下でフェリー埠頭に残って見張っていた隊員から『フェリーが動き出した』との報告を受けた。H G達はテレビの前でフェリーが湾内に進入する様子を中継しているのを見ていた。

フェリーはやがて、フェリー埠頭に着くが、着岸せずにそこで停船した。

普通なら、岸壁に居る港湾員に対してフェリーからもやい綱を引き寄せるガイドロープがフェリーから射出される。岸壁に居る港湾職員がそれを手繰り、その先に結びつけてあるもやい綱を引き寄せて、岸壁の係留柱にもやい綱の先端の輪を通し、船内のもやい綱を巻き上げて船を固定する。

それが、テレビを見る限りでは、ガイドロープも船体から発射されず、また見たところ岸壁には港湾職員が待機している様子も見えない。それに、タグボートもフェリーに付きまとうように居るが、距離を取っていて一向に近づかない。おまけに水上警察署の警備艇の姿も見える。

H Gは不審に思いまた港湾局に電話した。港湾局の話では、元々あのフェリーにはフェリー埠頭まで無人操船できる機能があり、その操作は港の入り口で乗り込む水先案内人が行うのであるが、それが出来ず、このまま湾入り口で停泊させたままだと、他の船舶の往来の邪魔になるので、政府機関に許可を貰い、特別に港湾局がフェリーの自動操船装置に外部から強制接続して、湾内のフェリー埠頭まで入港させたとの事。

それを聞いてH G「(技術の発展ってスゲーなあ…これじゃフェリー乗っ取っても逃げられないじゃん!)」と思った。それと同時に「(おあつらえ向きに仕事やし易くなった)」と

も思った。

H Gはじめ、I FとT T（T Tは碇屋の社員ではありません）ならびに碇屋のエージェン
ト達は、テーブルを囲み“親父モード”でデイスカッションを始めた。

H G「あの乗っ取られたフェリーには、ウチ（碇屋）の警護任務を請け負った人気歌手のI
Mさんが乗船している。そのおまけに以前F県領地の事件で捕まえた狸と貉も乗船してい
る」

I Y「それ、本当ですか？」

H G「F子ちゃんがそう言っている」

I F「F子ちゃん言うな！」

H G「で、最悪な事にY Mも乗っている」

T T「えー」

H G「乗っ取り犯は、あの狸と貉の奪還を目的としたC国の反政府組織の特殊部隊または工
作員だと思う。貉（C国大使）の国の兵士と一般に知れたら、外交問題になる。多分、そい
つらを送り込んだ潜水艦が、沖で海軍が追い回しているのも機密事項になっているだろう
…従って乗っ取り犯がその正体がバレずに、無事に逃げおおせるために“乗っ取り犯”と
して、振る舞うためには、どうする？」

I F「身代金と政治犯の釈放と、逃走用のヘリ…これが本命ね…を用意して、帝都内の大使
館に逃げ込む…と言うのは？」

H G「あからさまに、奴らの大使館だとそれはそれで問題だねえ…第三国…それも、C国に
一番近い大使館ならあり得るかも…」

T T「乗っ取り犯が、全員生き残って逃げることを目的とすれば、元々の目的は、大使の奪
還だから…」

H G 「なので、逃げられないと分かった以上、狸と貉の口を永遠に封じてそれでおしまいならしいのだけど。最悪…全員道連れ…なんてことが…」

H Y 「あり得るけど、それじゃあこちらの仕事にならず、下手すりや大損！」

H Y は最近H Gの書齋で経営の本とか読んでいたので、思考がその方面に向いている。

I Y 「最低、Y M支部長とI Mさんとそのスタッフは無傷で助けたい…」

T Y 「狸と貉は？」

H G 「いっその事、二人供死んでくれた方が、両国のメンツが立つのでは？」

とH Gはシレッと言った。続けて、

H G 「そうすれば、あのテロ事件（F県領地の事件）は、狸が雇ったテロリストが起こした事にして、貉はその証人として帝都に移動中に乗っ取り犯であるテロリストの残党に殺されたと一般に報道すればすむ。なにせ、あの事件の真相を知っているのは、海軍と我々だけだし…こっちは、それをネタに口止め料を貰える」

…等と皆、F県領地の事件でH Gから話合いでの意思疎通の方法を学んでいるので、みな積極的に意見を出す。

T Y 「そういえば、そもそもなんでフェリーなの？」

H G 「いい質問だね、鉄道は破壊工作が考えられるし、破壊された鉄道インフラを元に戻すのは時間がかかるから駄目だろうね。車もまた同じ…なにせ、貉だから…C国の特殊部隊になにされるか。飛行機はそれこそハイジャックされて、飛行機ごとC国に飛ばれたら元も子もない。だから船にしたんだろうが、まさかこの展開になるとはC国の反政府組織も政府も思っただけだったろうね」

I F 「そもそも、乗っ取り犯はなんで逃げなかったの？」

H G 「連中のプランでは、貉と…多分狸込みかな？を連れて迎える潜水艦で脱出するのが最善案。それがダメなら、フェリーごと本国に行くのが第二案。港から狸を殺して貉だけ連れ

て大使館に逃げ込むのが第三案。最低は、貉と狸を殺して、自分達だけ脱出する」

TT「乗っ取り犯が全員死ぬという筋書きは無いんですね…」

HG「ないね…あくまで逃げ切らないと、死体から素性がバレたら外交問題」

HY「第一案がなくなり、第二案を行おうとしたけど、あの船（特に航海要員）の人数では…またさっきのフェリーが外部からコントロールされて、フェリー埠頭まで港内に侵入できる事がダメ出しになって、船が外洋型フェリーでも自力で国に向かえないことを悟ったのでは？」

IF「どうやって、解決するの」

HG「前にも言ったように、あのフェリーを浮かぶ城に見立てれば、さながら籠城戦だ…それも外からの救援が無い状態の…ならば、策としては兵糧攻め！」

TY「それから、自棄にならないように逃げ口を敢えて開ける…『囲む士は欠く』」

HG「よく言ったTY、フェリーは今、埠頭と海面を港町水上警察署で取り巻いている…ここに正規陸軍が絡むとちと厄介…ましてやF県領地で失敗した近衛師団（『巻き込まれ親父の撤退』参照）がしやしやり出てきたら力攻めになって、乗っ取り犯も自棄になるだろうなあ…でも、それは無いと思う」

HY「…なんで？」

HG「今回狸と貉の護送は、内密になっている。事実テレビのニュースでは人気歌手IMさんがフェリーの乗船名簿の載っていると騒いでいるだけで、狸と貉の話はこれっぽっちも出てこない。IMさんがフェリーの乗船名簿の載っている事実だけに目を向けさせる報道管制と言う事もあるけど、乗っ取り犯にはフェリーに狸と貉が乗っていないとしている事が唯一の逃げ口であり、また正規軍がこの件に首を突っ込めない理由でもある」

IF「後は、兵糧攻めの効果がいつでるか」

TT「案外、早いんじゃない？人気歌手のIMさんは、C国でも国賓待遇だから…彼女が空

腹を訴えたら、乗っ取り犯も困るでしょ」

H G 「そりゃ、そーだ」

I F 「では、乗り込むタイミングは乗っ取り犯から食事の要求があったとき？」

H G 「だね…ここに、ネットからダウンロードしたフェリーと同型の構造図がある。乗っ取り犯が何人いるかの情報が欲しいな…潜水艦一隻だと10人が関の山だと思うけど…どこに何人配置しているか…」

H G は、テーブルの上にフェリー会社が一般に公開しているフェリーの構造図を表示した情報端末を出した。全員身を乗り出してそれを見る。

I F 「操舵室、1等室、2等室、3等室、それと特等室…あとエンジンルーム…それだけで6人…あと4人かあ…操舵室とエンジンルームと特等室にはもう一人ずつ…それでも後1人…」

と言いながら、I F はフェリーの構造図を指さす。

I Y 「特等室が気になりますね」

H G 「なぜ？」

I Y 「特等室には、狸と貉…この二人は、一応護送対象でもそれなりの地位の人だから…あと、I M さんが国際的な人気歌手だそうですから（I M は国際的な人気歌手ですが、I Y は芸能人に興味があまりないので、こういう発言になります。作者注）、特等室に居る可能性があります」

H G 「だとすると…？」

I Y 「乗っ取り犯に人質に取られて、船から逃げられるかも…」

H G 「しまった！」

H G は芸能事務の芸能事務所〇×エージェンシーの社長秘書に電話してI コンサートのフ

エリーの客室予約について問い合わせた。その結果、特等室は全室予約されていて、仕方なく一等室を取ったとの事…それを聞いて、フェリーの構造図（特等室と1等室は別階のフロア）を見ながらHG達は安堵した。

HG「…すると、特等室は、狸と貉だけだろうな…」

IY「だとすると、特等室には、乗っ取り犯は2人も居ないかもしれません…」

HG「どうして、そう思う？」

IY「狸と貉にとつては、乗っ取り犯は助けに來た人達だから、いてもリーダー格の人が居るだけだと思います」

HY「そうかもね、F県領地の時も温泉地の旅館の警護は意外と手薄だったし…」（巻き込まれ親父の反撃） 参照

HG「…とすると、操舵室とエンジンルームに各2人ずつ、1等室に2人、2等室と3等室に3人、特等室は1人…これで10人…あくまでも仮定だけど」

IF「そうね」

HG「次に、あのフェリーに乗っているYM…当然、F県領地の事件で捕まえた狸と貉の護送任務だよな！他に社員は？」

IF「2人居るわ」

HG「当然、人質になってるよな？」

IF「そうだと思う…昨日の晩から連絡が取れないから…」

HG「ふーん…仕事の依頼主は？」

IF「…海軍…」

とボソリと言った。それを聞いたHG、OJ少尉とYMのメールについて辻褄が合った。

●O J、お前かい！

「IF…これを見せてくれ」

と言って、H Gはポケットからスマートフォンを取り出し、O J少尉とY Mから送られてきたメールを見せた。H GとIFの後ろからT T・H Y・I YそれとT Yが覗き込む。

「O Jって誰です？」

H YがH Gに訊ねる。

「O JはF県領地の事件で加勢してくれた対岸のO県領地の海軍基地に勤務する情報課の少尉さんだ。俺とY Mが海軍基地に行つて彼の上官を交えて話をして、その時メールアドレスを交換した（「巻き込まれ親父の反撃」参照）」

と言って。H Gはスマートフォンを操作して、

「どれ…一つO Jに聞いてみるか…」

と言って、H GはO J少尉に『本日Y国際港に着いたフェリーについてなにか知っているか？Y Mがそれに乗っていて人質になっているようだ。知っていたら正直に教えて欲しい！』とメールした。

すぐさまO J少尉から返信があり、H Gは驚いた。メールには『フェリーに大臣と大使を乗せてY国際港に向かわせた。H Gの居た会社のY Mに護送を依頼したのは私。船が乗っ取られているのも知っている。私はフェリーに遅れて駆逐艦で上官のA Tと帝都に向かつていたら、乗っ取られたことを知り、フェリーに追いつこうとしている最中に不審な潜水艦を発見して現在追跡中…お怒りごもつとも！』

「なんて、こったい！」

H GはY Mに大臣と大使の護送を依頼した本人から事の顛末と今起こっている事件を聞いた。

「さて、フェリーは何時頃乗っ取られたんだろう？」

H Gは再びO J少尉にメールした

『フェリーの乗っ取りが判明した時刻と場所は？』

『今日の03:00、O Z岬沖』

『その時間、貴官の乗船する駆逐艦の位置は？』

『O Z岬沖：フェリーまでの距離約7海里（1海里…1,852メートル）。なおその2時間前に不審な潜水艦を発見し、追跡を開始している』

『情報提供に感謝する』

『陸に上がってそっち（白山亭）に行ったら、なにかご馳走しろ！』

H GはO J少尉の返信に「（うるへー）」と思った。

「ん？潜水艦とフェリーと駆逐艦の接触位置がおかしいなあ…乗っ取り犯は潜水艦で来たのではないのか…すると…まだF県領地にはC国の反政府組織の工作員が居るらしい…そいつらか！乗っ取り犯は！すると潜水艦は迎えかあ…」

●それにつけても、Y Mの居場所は

O J少尉とのメールでのやり取りが済んだ後で、H Gは思案顔になり、

「Y Mの居所がせめて分かれば…」

とつぶやくと、I Fが

「多分、狸と貉が居る特等室では？」

と言った。I Fの言葉に確信がないので、H Gは

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない…」
と言った。

その時、フェリーの埠頭に残っているI F部下から、Y Mの部下が監禁されている場所が

判明したとの報告がI Fにあった。

「よくわかったな？」

とH Gが言うと、I Fが会社支給のスマートフォンを見せて

「フェリーの一室に監禁されていて、そこから合図したらしい」

H GはI Fにドローンとヘッドマウントディスプレイを渡して、港に行きドローンによる偵察を依頼した。

「なんであんたが行かない？あんた地元で顔が広いから：港湾局とかにコネがあるじゃない」

「あるけど、俺が行ったら、港に入る前に警察に止められる。その点F子ちゃんは、任務でフェリー埠頭に入れる特権があるだろ？（この時点では、H Gは民間人であり、I Mの警護の依頼を受けているが、それだけでは港に張られている警察の規制線を越えられない。その代わり、I Fの民兵会社は、大使と大臣を抜きにしても自社の社員が人質になっているとの理由で関係者として規制線内に入れる。作者注）」

H Gはそう言いながら「（まてよ！）」と閃いた。「そうね」とI Fが返事をして、ドローンとヘッドマウントディスプレイを持って白山亭を出て行った。

フェリー埠頭の前にあるモータープール：ここの一角にI F達が乗ってきたトラックが止めてある。その中にはI Fの部下が1人フェリーを見張っていた。

I Fが部下2人を連れて、埠頭の倉庫の陰から様子を伺い、隙を見て走ってトラックの荷台に飛び乗る。

「隊長」

「ご苦労様、疲れてない？」

「はい、大丈夫です」

「これ、H Gの店のコーヒーだけど、美味しいからこの子達と交代して一息入れて」

I FはH Gの店からテイクアウトの紙コップに入ったコーヒーを渡した。I FもH Gの前では白山亭のコーヒーをなんだかんだと文句をつけているが、実は気に入っていた。(多分、H Gの前では今後も絶対褒めないと思う。作者注)

「はい、ありがとうございます」

I Fは、見張り役の隊員に

「それで、どこ？」

「隊長、あそこです」

部下が指さす方向にI Fが双眼鏡を向ける。

I Fの部下が指さす方向フェリーの一室から発光信号と思われる点滅が見えた。信号の内容は「ワレ、ココニトラワル」。I Fがその部屋を双眼鏡で見ると、以前F県領地の事件で一緒に作戦したY Mの部下が居た。

I Fは持っているLEDライトで、「リョウカイ、イチカクニン」と返事した。I FはY Mの部下が囚われている場所が分かったが、どうしたものかと辺りを見渡すと、H Gから渡されたドローンとヘッドマウントディスプレイが目に入った。

I Fは「(これだー)」と思い。ドローンに紙とボールペンと会社支給のスマートフォンを括り付け、

「重そうだけど、飛ぶかな？」

と言って、トラックの荷台でドローンを起動した。多少不安定ながらもドローンは浮き上がった。そして、I Fはヘッドマウントディスプレイを装着して私物のスマートフォンと連携(「巻き込まれ親父の反撃」時にI Fのスマートフォンにもセットアップが済まされている。作者注)させてドローンを操縦するとなんとか行けそうなので、そのままトラックの荷台か

らドローンを飛び立たせ、途中不安定で何度か高度が下がったりしたが、なんとかYMの部下の居るフェリーの部屋の所まで、行くとYMの部下が機転を聞かせて窓を開けてくれたので、そこにドローンを飛び込ませた。

そして、IFはドローンのスイッチを遠隔操作して切ると、装着していたヘッドマウントディスプレイを外して私物のスマートフォンで会社支給のスマートフォンに電話をかけた。すぐにYMの部下が対応する。

「こちら本社のIF、あなたたちはYMの部下？」

『あつ、はいIF隊長ご無沙汰しています。私達はF県領地支部のYM支部長の部下です』

「そちらの状況を報告して」

『はい、私達はこの船の特等室の入り口でF県領地の事件で逮捕された大臣と大使の居る部屋の警護をしていましたが、昨晚ふいに襲われ気絶させられて、気づいたらこの部屋に監禁されていました』

「そこにYM隊長はいるの？」

『いえ、居ましたが、YM隊長は1時間前に犯人に連れていかれました』

「…そう、居ないのね」

『…はい』

「大臣と大使はどこに？」

『特等室です。特等室は全室この護送の為に借り切っています』

「ありがとう。特等室の大臣と大使の部屋の位置と内部の見取り図をその紙に書いて、ドローンに括り付けたら窓から放り投げて…見つかったら、まずいので通話を切るわ…気をしっかり持つてね。必ず助けに行くから」

『はい、ありがとうございます』

「YMの居所が分かったら、連絡してね。じゃ、通話を切るわ」

『はい』

しばらくして、フェリーの部屋からLEDライトで合図があり、IFが双眼鏡で見ると、窓からドローンを持った手が見えた。IFはドローンのスイッチを入れて飛び上がらせ、トラックの荷台に飛び込ませた。

飛び込んできたドローンはIFがキャッチできずにIFのお腹に衝突した。IFは「自分の腹をモニターで見るとはね…これじゃHGに掴まれるわけだ…」と苦笑いをした。ドローンにはYMの部下が描いた特等室の大臣と大使の部屋の位置と内部の見取り図の紙がついていた。

IFは、また部下を1人残して白山亭に帰ってきた。

「詳しい情報を入手したわ」

と言って、メモを見せた。そこには特等室の大臣と大使の部屋の位置と内部の見取り図が書かれていた。

「ふーん、ここか…でもこれF子ちゃんの筆跡じゃないね…どうしたの？」

「ドローンに紙とボールペンとスマートフォン括りつけて、YMの部下の居る部屋に突っ込ませた…それからスマートフォンでYMの部下と直に話ができたわ」

「へえー…凄い事するね…それで乗っ取り犯の数とYMの居所は？」

「YMの部下の話では、乗っ取り犯の人数は不明…、特等室は狸と貉だけ…YMは1時間前までは一緒に居たけど、YMだけ犯人に連れていかれたって」

「そうか…」

「YMの部下達の居場所？」

「……」

I Fが指さした場所はフェリーの最上階のバーラウンジから特等室に通じるデッキの程の一室を示していた。

色々意見を交わし、考えがまとまったところで、H Gは電話をかけまくった。かけた先は、港の港湾局。港湾局には幸いフェリーを担当するはずの水案内人が丁度居たのでその時の様子を聞いた。次に港町水上警察署と地元港町警察署に電話してそれぞれ知り合いの警察署長（港町警察署署長はH Gの親戚）に話をする、警察はフェリーに元C国大使と元外務大臣が乗船しているのを知らなかった：どうやら、護送は海軍が独自に行っていたようだ。H Gは全部から人をよこすように伝えると、当の水先案内人と港湾局長と港町水上警察署署長と地元港町警察署長自らが部下を伴って白山亭に来た。軍からないがしろにされて憤る各者にH Gは今までまとめた憶測を話し、協力を願うと3者は快く応じた。H Gは帝都から特殊急襲部隊T S A Tが来る前に、正規軍とI Fの民兵会社をペテンにかけ、I Fに手柄を取らせる作戦を立案する。

無論、港湾局と港町水上警察署と港町警察署には人気歌手I Mの奪還の手柄を報酬とした。

●作戦準備

フェリーから、食事の要求が港湾局経由で入った。H Gは直ちに白山亭の厨房に商店街の各親戚筋の料理店の調理人達を集めた。

「みなさん、本日はお忙しいところをわざわざありがとうございます…お願いする料理は今ニュースで報道されているこの（Y国際港）フェリー埠頭にいるフェリーに乗っている乗っ取り犯と人質に提供する配達料理になります。なお、人質には人気歌手I Mさんが居ますので、そのつもりで調理と梱包をお願いします」

H Gは作る料理に対して説明すると料理人たちは胸を叩いて

「任せろ、H G。人質には人気歌手I Mさんが居るからな、腕によりをかけて作ってやるよ

…Y 国際港商店街の宣伝になるしね」

「ありがとうございます」

とH Gは言つて、料理人達は各自自分の店に向かった。その姿を見て「(うちも料理人雇わないと…)」と思つた。

H Gは白山亭の2階に上がる。そこに居たI Fに対して、

「突入隊に人が欲しいな…ウチの3人娘(H Y・T Y・I Y)の他にT Tに手伝ってもらう

としても、全然足りない」

「うちの部隊から人を出すわよ」

I Fは当然と言う顔をして言つた。H Gは「(当たり前だ…元々あんたの仕事だろ…なにを今更)」と突っ込みを入れていた。

「お前さん(I Fの分隊)とこの6人(1人フェリー埠頭に見張りに出ているため、全員女性)じゃまだ足りん…警察から応援たのむかあー、ついでに発砲許可も…当然、お前さんもウチの女給の格好をしてもらうけどね」

H Gは冗談でI Fを指さして言つた。I Fは中で給仕している女給姿のI Yを見て

「エーッ、ヤダー…そんな…H G」

と言つて、まんざらでもない顔をしたので、H GはI Fの女給姿を勝手に想像して「(キモッ)」と思ひ。

「やっぱ、ホールスタッフの衣装にしよう…サイズあったかなあ…」

と冷たく言つた。その途端I Fはむくれて

「何よ!」

と言って、IFはTTを見た。

「その方が動きやすいでしょ。下スラックスにすれば、TTにもスラックス履かせるし」

「うーん、それもそうだけど…」

IFはまだ女給服に未練があるみたいだった。

「私、白山亭の女給服着てみたかったのー」

「わたしも…レトロなところが可愛い」

港町水上警察署と港町警察署から女性警察官の加勢を募集したら、人気歌手IMの救出とか以前に白山亭の女給の制服を着たいと言う理由だけで定員を上回る応募者が名乗りを挙げた。それを聞いてHGは「白山亭の女給」は、それだけでブランドであることを知った。

女性警察官達が嬉しそうに騒ぐ中、TTとHYは女性警察官達に防弾ベストと女給服の着付けと武装を手伝っていた。IYとTYは、フェリーに運び込む食事を入れたフードコンテナや箱に武器を入れる偽装を行っていた。

やがてすべての準備が整うと、港湾局から入手したフェリーの詳細な内部図面を見ながら、HGは全員に配置と作戦を指示する。

「フェリーの見取り図がここにある。皆頭に入れておいて。一応港湾局さんの公開サーバーにこの図をアップしてあるから、ここにある二次元コードにあるアドレスにアクセスすると見ることができるので、各自スマートフォンで確認して」

「その上で、作戦を説明する。IF」

「はい」

「IFは、1等室並びに特等室の指揮をお願い」

H Gがいつもの「F子ちゃん」と言わないことに違和感を覚えたが（覚えたんだ…）笑）作者）、素直に「はい」と返事した。

「1等室は最上階のバーラウンジに乗客を集めて、そこで食事の提供をお願い。それから各部屋のチェック…もし部屋を出たくない乗客が居るなら、当店のサンドウィッチと飲み物を渡して合図するまで部屋の鍵を閉めておいてくれるようお願いする」

「わかったわ…で、肝心の狸と貉は？」

「あいつらは、腹が減ったら自ら餌を求めてやってくるから、それまでほっといいぞ。別にあいつらにウチの商店街の美味しいモノ食べさせなくても構わん！」

「ひどい事いますね（笑）」

H Yが笑って言った。

「それよりもIMさんの方が大事！彼女と関係者はバーラウンジに來させて、なるべく一か所に集めて。それを人海作戦で女給達に取り囲んで欲しい。IFは、人質確保と乗っ取り犯排除のチームを編成して、人質確保チームはI Yが指揮」

「はい」

「IFはバーラウンジの乗っ取り犯を排除した後、特等室の狸と貉の捕獲に行ってくれ。その際にY Mが人質に取られるかも知れんが、その時はY Mの命が大事…そこまで追い詰めればなんとかなる」

「なんか、そこだけ行き当たりばったりね…H Gらしくない」

「分らんものは、どうしようもない…そこは臨機応変…」

I FはH Gが民兵会社で新入社員の研修を行っている最中に、スケジュールに対して社長の承認を貰っているのにも関わらず度々社長の無理な横やりの要求に嫌気がさし、社長に文句を言ったら「臨機応変に対応しろ！」と怒鳴れ、その要求も取り入れて研修をスケジュール通りになんとか終わらせていたことを昔二人で飲み歩いていた頃にI Fに珍しく愚

痴を言っていたのを思い出した。そして、「(そうか！Y Mが人質に取られたら、Y Mに危害が加えられない様にその場で押しとどめて、その内H G自らY Mを助ける気だ…あたしは、それまで犯人を逃がさないようにすればいいのか…)」と、H GがI Fに語らない心中を察した。

「T T」

「はい」

「T Tは、二等室ならびに三等室の指揮をお願い」

「ハイ」

「二等室、三等室の乗客達はレストランに集めて、こっちは個室が無いから、全員集めて、万が一病人や体調が悪い人が居たら、水を提供するとか言って、多少無理させてもレストランに集めて…そこで確保」

「ハイ」

「それから、エンジンルーム突撃チームをT Yが指揮をする」

「はい」

「エンジンルーム突撃チームは、最初T Tと一緒に行動して、隙を見てエンジンルームに向かう」

「はい」

「エンジンルームは、無理に制圧しなくていい…乗っ取り犯はエンジンルームに閉じ込めでもいい」

「? ?」

「あそこ(フェリー埠頭)で、エンジン破壊しても、沈む前に全員脱出できる」

「次、H Y」

「はい」

「お前は、俺と女性警察官一人とで操舵室の制圧をする」

「はい」

「俺はこれから港湾局に行つて、先にフェリーに潜入するから、H Yお前が当店のサンドウイッチとコーヒーを持って操舵室に来てくれ…その際に…」

と言つて、H Gは自分の愛銃をH Yに渡した。

「では、応援の女性警察官の皆さんは、今説明した各班の班長の元に分かれて下さい…ケンカしないだね」

「「はあーい」」

「班分けができたところから、拳銃の銃弾をこの銃弾と交換してください。また、抜いた銃弾は、こちらの箱に入れて下さい。警察の方で38口径ACPリボルバー弾は、こちらの箱、38口径オートの人はこちらの箱…交換して残った銃弾は後で返してもらいます。その時にこっちの銃弾はお返しします…それから、各自防弾ベストを下に着用しましたか？まだの人は、各班の班長さんに言ってください」

と触れ回るH Gが配っている銃弾を受け取り、それを見たI Fは、

「H G…この弾は…もしかして？」

「そう、F県領地の事件で使った対テロ用の強化ゴム弾」

「そんなのどこから入手したのよ？」

「O県領地の海軍さんとの海兵隊のSR大尉にちょっと口を効いてもらい、近所のY海軍基地に駐屯している海兵隊からこの弾の発注元を紹介してもらつて、手に入れた…だから、ウチの仕事（碇屋のエージェント業務）は安全だよ——」

「ばーか」

「あと、港町警察署の方々と港町水上警察署の方々は、それぞれ制圧後にフェリーに突入してください」

「はい」

港町警察署と港町水上警察署の連絡要員は、それぞれ署にH Gの作戦を伝えた。

「港湾局さんは、私と水先案内人の人をフェリーに乗せる算段をお願いします。それと接岸の準備を…その際に、一つお願いがあります」

と言って、H Gは港湾局の人にある指示をした。

「わかりました」

「ところで准尉」

T YがH Gに声をかけた

「なんだ？」

「棒か木刀持ってちや、ダメですか？」

「なんで？」

「銃より、接近戦で優位に立ちそうですから…」

「あんなー、船の中の通路は狭いんだ、そこで木刀や棒を振り回す余裕はないぞ！海賊映画でも見たか？それに、その女給服に棒や木刀は似合わないぞ！」

「ハハハ…スミマセン」

「だったら、これ持ってけ！」

と言ってH Gは腰に吊っている伸縮式の警棒をT Yに渡した。

「やるよ、これなら服のどこかに隠せるだろう…」

「隠せるって…拳銃と同じくスカートの中になります…」

と言って、TYは女給服のスカートを途中までたくし上げた。

「…だろうな…」

HGはソップを向いて言った。

各自、自分の配置に散る前に、HGが

「それでは、方々ぬかりなきよう…また、作戦会の合図は…と同時に！」

と全員に対して目配せして言う、

「[[ハイ！]]」

その際に、一部の人は笑って返事をした。HGのセリフは、昨年的大型時代劇で主を謀殺された騎士団が、主の敵を取るために主を殺した貴族の屋敷に討ち入る時に騎士団のリーダーが部下に対して言ったセリフをHGが口調まで真似て言ったのである。それを見てTYは「わたしの事言えません！」と突っ込みを入れた。

●作戦開始

HGは港湾局で水先案内人の助手として制服に着替え、港湾局のボートでフェリーに近づく、最初乗っ取り犯に帰る様に脅されたが、食事を運び込むのに、接岸してフェリーのランプウェイを操作する必要がある事を説得すると、乗っ取り犯は渋々乗船を許可した。乗り込むときに乗っ取り犯から身体検査を受けるが、丸腰であることが確認されると、操舵室に通された。その時点でHGは操舵室に2人、入り口に見張り1人の乗っ取り犯を確認した。HGは腕に着けたウェアラブル端末を操作して操舵室の乗っ取り犯の人数を各フロアの作戦責任者に一斉通知する。

フェリーは水先案内人の指示(※)で、フェリー埠頭に接岸すべく動き出した。フェリー

埠頭に接岸するためにタグボートが補助していた。

※港湾内での大型船舶の接岸・離岸には、タグボートや岸壁の港湾職員との連携が必要なので、船の操船ならびに乗組員の指揮、タグボートや岸壁の港湾職員との連携を水先案内人が行います。

フェリー埠頭に接岸した時に、軍か警察になだれ込まれることを恐れた乗っ取り犯は、甲板の見える所に女性を人質に埠頭から離れるように船外向けスピーカーで指示を出す。

人質はY M：戦闘服ではなくスーツを着ていた：多分、フェリーに居る大臣と大使の護送任務で、他の乗客に配慮しての事だろう：それを埠頭で見張っている部下から港でフェリーに乗り込むべくトラックで待機しているI Fに連絡が入る。

「場所を詳しく教えて」

『特等室のあるデッキの階です。画像を送ります』

フェリー埠頭には、I Fとその部下達、H Y・I Y・T Tと女性警察官達が、白山亭のホールスタッフ姿と女給姿でそれぞれ、ワンボックスワゴン車とトラックに乗ってスタンバイしていた。

接岸するには、普通なら、フェリーからもやい綱を岸壁に出し係留柵に通して船を固定するが、それを今回は行っていない。それを行う港湾職員まで人払いした乗っ取り犯が悪いのだが、H Gの作戦でもある。

警察を始め、マスコミが埠頭からいなくなったことを確認し、乗っ取り犯は食事を乗せたトラックをフェリーの車両乗降口のランプウェイの傍まで来るように指示をした。

10人乗りのワンボックスワゴン車2台とトラックが2台、ランプウェイに近づく。そし

て、ランプウェイが静かに開く。開ききったときに、乗っ取り犯が2人出てきて、ワンボックスとトラックの内部をチェックする。それぞれのワンボックスワゴン車の中は白山亭の女給服を着たHY達碇屋の社員とIFの部下の民兵会社の女性達と警察の女性警察官達が乗って居た。またトラックにはIFとIFの部下が白山亭のホールスタッフの制服を着て運転していた。同じく白山亭のホールスタッフの制服を着たTTはIFの部下の運転する別のトラックに乗っていた。

乗っ取り犯のチェックがすむと、トラックはフェリーに入り、再びランプウェイは閉じられた。

車両室で、乗っ取り犯に促され、トラックから食事の入った箱やフードトレイを降ろす。

女給の多さに最初驚いた乗っ取り犯だが、トラックに積まれた食事の数を見て納得したようだ。

そうして、食事の入った箱やトレイを持った女給に扮したHY達碇屋のエージェントと民兵会社の隊員達と女性警察官達は作戦会議でHGから指示された場所に散っていった。

食事の準備が終わると艦内放送でTTが呼びかける

「ピンポン！ご乗船のお客様お待たせしました。お食事のご用意ができましたので、ご案内いたします。特等室ならびに一等室ご利用のお客様は、本船最上階に御座いますバーラウンジにてお食事を提供します。二等室ならびに三等室のお客様は本船レストランフロアにてお食事を提供します。なお、本日のお食事はビュッフェスタイルです。提供は地元Y国際港のある地元商店街：給仕は地元Y国際港の老舗女給喫茶、白山亭の女給達が昔ながらの制服でおもてなしいたします」

TTのアナウンスを聞いてHGは

「あいつ…ちゃんと店の宣伝して…」

と苦笑いをした。

●バーラウンジで：

「あつ、IMだわ！私、ファンなのよ！！」「私も！！」

と言って、確保対象の人気歌手IMとそのバンドメンバー、スタッフを見つけ、数人駆け寄る。慌てた乗っ取り犯が銃を向けて制すが、若い女の子たちに囲まれて、IMとそのバンドメンバーは揉みくちにされていた。それを見て、そこに居る6人の乗っ取り犯も、IMが母国でも人気で本音は自身もサインくらい欲しい気持ちでいるので、「(ミィーハーだなあ……)」と銃を下に向けてしまった。その間人質確保チームのリーダーIYは、IMとそのバンドメンバー、スタッフに『警察です。助けに来ました。騒がないで指示にしたがってください』と書かれた紙を見せていた。

IFはHGの指示通り、部下に一等室の各部屋のチェックを行うが乗っ取り犯の目的であるC国の元大使と元外務大臣の居る特等室はあえて無視した。また、IFは部下に命じて、乗っ取り犯の目を盗んでバーラウンジと特等室の間の部屋に閉じ込められているYMの部下達を救出した。

また、IFは乗っ取り犯数を各フロアの作戦責任者に一斉メールした。

HGには腕のウェアラブル端末に届く。

●レストランフロアで：

「皆様、安心してください。警察の者です(方便)。今しばらくの辛抱です。ここで暖かい食事を取りながらお待ちください」

と言って、TT達が乗客に対して暖かい飲み物と、食べ物をサービスしていた。ここには乗っ取り犯が何故か居なかった。

TYが乗っ取り犯のいないことを良いことに、追加の食事を車両室にあるトラックに取りに行くフリをして数人連れてエンジンルームに向かった。

●エンジンルームで…

エンジンルームには乗っ取り犯らしい人物が居なかったので、TYはここで何かあっても、問題がないと言う事で、エンジンルームに居る乗組員にエンジンルームを閉鎖して閉じこもる様話をして、後は人質奪還後に突入する警察に任せることにして、レストランフロアに戻った。

TYが戻ってきたところで、TTはメールでレストランフロアとエンジンルームの状況を各フロアの作戦責任者に一斉メールした。

HGには腕のウェアラブル端末に届く。

●操舵室で…

操舵室に続く階段でHYは侵入した各員から配置についたことを確認して、ついてきた女性警察官に待機を命じて、自身はトレイとポッドを持ってブリッジに近づいた。

女給姿のHYが「白山亭」と書かれたコーヒーの入ったポットと、紙カップ・砂糖・ミルクポーションとマドラーとサンドウィッチの箱をトレイに乗せて上がってくる。入り口に居る乗っ取り犯に案の定、制される。

「止まれ！なんだ？」

「白山亭の者です。下に居る人からこちらにコーヒーと軽食の提供をするように言われたので持ってまいりました」

あくまで女給に徹したHYは乗っ取り犯にコーヒーをすすめるが、コーヒーになにか入っているのではないかと不審に思う乗っ取り犯は、水先案内人助手役のHGを引っ張って

くる。乗っ取り犯に促されるままHGはコーヒーを一口飲む。何も起こらない事を確認して乗っ取り犯はHYに持ってきたトレイとポットを置くように指示した。そこで、HYはわざと転んでトレイをHGの足元に滑らした。

「すみません！すぐ、代わりをお持ちします」

と、言つてHYは慌てて操舵室を出る。操舵室を出たHYは、まだフェリーに接触しているタグボートに合図した。タグボートは合図を期に、フェリーを埠頭に押した。

当然、岸壁に係留されてなく完全に接岸されていないフェリーは、岸壁に接触し大きく揺れた。タグボートが押した（人間でいうと、軽くどついた程度）だけであるが、岸壁にはゴムダンパーがあり、それが反動を大きくした…それが、HGの指示した合図であった。

と同時に、フェリーの各所で閃光と銃声が轟いた。

●操舵室でえ…

HYは揺れで体勢を崩した入り口に居た乗っ取り犯を投げ飛ばして、HYがブリッジに閃光弾を投げ入れると同時にHGが懷から溶接用サングラスを素早くかけ、先程HYが足元に滑らしたトレイの裏に張り付けてあったHGの愛銃を剥がしてブリッジにいた乗っ取り犯を撃った。同時にHYと女性警察官は自身のスカートを払いあげ、スカートの中の太腿に装着した拳銃を抜いてブリッジの扉からサポートに入る。これで、操舵室は制圧した。

●特等室でえ…

HG達が操舵室で行動起こす前…

特等室に居る大臣と大使は空腹だが、ここから出ないように乗っ取り犯のリーダーであるC国の反政府組織の工作員に釘を刺されていた。

「どうします？大使。我々も腹が空きましたし、バーラウンジに食事に行きませんか？」

「それは…私も同意見なのだが…なにせ、リーダーがここから出るなど行っているので…困った」

そこで大臣。ハタと思いつき。

「隣室に警護（護送監視なのですが…（笑作者））の女性リーダーが居るから、彼女に持つてこさせましょう…」

「そうだね、あの女なら仲間を人質に取っているので、従うだろう」

大臣は、隣室に閉じ込められているYMを連れ出して、

「君、バーラウンジに行つて、我々の食事を持つてきなさい。逃げたら部下の命は無いぞ」と脅すと、

「ハッ、ハイ」

YMは怯えて返事した。

YMは、注意をしながら恐る恐るバーラウンジに行った。そこにはIFが白山亭のホールスタッフの服を着ているのを見つけた。IFもYMの姿を認めたが、バーラウンジには乗つ取り犯が居るので、お互い声を掛けられなかった。

YMはトレイを持つて、皿に料理を乗せながら、IFに近づく。IFも飲み物を乗せたトレイを持つてYMに近づく。IFはYMのトレイに乗せた飲み物を勧めながら、小声で

「YM…無事で…どうしたの？」

「IF隊長…私は部下を人質に取られて、大臣と大使の食事を取りに来ました」

「そう…それなら大丈夫！あつちに…」

IFがトレイのコップを持つた手の人差し指で示す方向に、YMの部下達が隠れているのを見つけた」

「あなたたち…よかったあ！」

YMは泣き崩れそうになったが、IFがよろける振りをしてYMに接触してYMの耳元

に、

「氣を確かに…ここでバレたら元も子も無いのよ！」

「はい」

「じゃ、とりあえず、ここで食べ物を選んでいて…じきに始まるから…」

と言って、I Fはウィンクすると、Y Mに対して「失礼しました！」と大きな声で誤り、Y Mと離れた。I Fはバーラウンジの片隅に行き、メールで「I M確保。Y Mと部下確保」と各フロアの作戦責任者に一斉メールした。

H Gの腕のウェアラブル端末に届く。H Gは腕時計を見る振りをして確認した。

「(良かった…Y Mは無事か)」

そのタイミングでH Yが操舵室に入って来た…その後、船が大きく揺れ、I Fはフードコテナの二重底の下から拳銃を取り出して、乗っ取り犯に対して「動くな！」と言って拳銃を構えた。

同時にバーラウンジに居る女給姿のI Fの部下達と女性警察官達、またI Mを取り囲んでいたI Yと女性警察官達も一斉に女給服のスカートを思いっきり捲り上げてスカートの内側の太腿に装着した拳銃を抜いて乗っ取り犯達に対して銃撃した。

銃弾を受け倒れた犯人を女性警察官が確保して制圧した。

I Fは拳銃を持ったまま、Y Mの所に行きY Mを抱きしめた。

「辛かったですよが、もう一息頑張って」

「はい、I F隊長」

I FはY Mに食事を乗せたトレイを持たせ、I F自身は部下と共に同じくトレイに食べ物や飲み物を乗せて特等室に向かった。

大臣と大使の居る部屋に着くが、その間乗っ取り犯に出くわさなかった。

「Y M」

「はい」

「中に犯人は？」

「多分、居ないと思います…犯人はあの二人に絶対部屋から出るなと釘を指して操舵室に行きましたから」

「そう…じゃ今頃H Gが犯人倒してるわ」

「えっ？H G先輩が居るんですか？」

「そう…話は、終わってから…準備はいい？」

と言って、I FはY Mに拳銃を渡した。Y Mは黙ってそれを受け取るとスーツの後ろに隠し、I Fに頷いた。

「では…」

「はい」

特別室のドアをY Mが開ける。

「スミマセン、遅れました…」

Y Mはおどおどしたフリをして、部屋に入っていた。その後、I Fと部下達が続いた。それを見て大臣は

「なっ…なんだ？」

「大臣と大使のお好みが変わりませんでしたのでえ…色々お皿に盛っていたら、多くなり、近くに居た女給さん達に運ぶのを手伝って貰いまして…」

とY Mは言った。そこにI FがY Mの横をすり抜けて、

「まずは、お飲み物をどうぞ…」

とドリンクを勧めた。大臣はそれを受け取ると、I Fは

「あらあー、大臣お久しぶり！」

と言って、後ろの腰に挟んでいる拳銃を抜いて大臣に突き付けた。と、同時にY MとI Fの部下達は拳銃を抜いて大臣と大使に狙いをつける(この二人は、一応護送中の身です。作者)。その時大臣はF県領地の温泉地の旅館でのI Fの事を思い出し(「巻き込まれ親父の反撃」参照)

「あつ、お前は！」

「まあ…嬉しい。思い出していただけたようで…」

I Fはニタリと笑って大臣を見た。それを横から見ていたY M「I F隊長…怖すぎます!」と突っ込みを入れていた。

●大団円

こうして、改めてフェリーからガイドロープを投げられ、もやい綱を受け取った港湾職員がフェリーを岸壁に係留し、改めてランプウェイと乗船口を開けた。

警察が「御用だ! 神妙にしろ!! (笑)」と乗り込んできたので、確保した乗っ取り犯をI F達に任せて、H GはH Y達と保護対象の人気歌手I Mとそのバンドメンバー、スタッフをつれて、乗船タラップから岸壁に降り立った。

埠頭に来たI Mの芸能事務所の社長M Kに彼女らを渡し、その場で簡単に今回の料金について打ち合わせを簡単に済ませて、後日詳細な話をすることにした。

「さて、白山亭に帰るぞ！」

と言って、H Gが歩き出すと、皆

「[[ハイ]]」

と元気よく返事をしてH Gの後を追った。H Gの隣にH Yが追いつくと、H GはH Yに対し、自慢の愛銃を出して、

「この銃、貴重なんだけどね…傷だらけになった」

「スミマセン！」

H Yが平謝りするのを、

「いや、お前さんが上手く俺の足元にこいつを滑らしてくれなかったら、別の結果になったかもしれない。よくやってくれた！」

とH GはH Yの頭に手を乗せた。

「へへっ…」

H Yは照れ笑いをした。いつもなら、H Yの頭をなざると「子供扱いしないでくれます！」と怒るのであるが、今回は褒められたので、頭をなぜられているのを気にしなかった。

「銃は、整備して、傷は補修すれば治る。人はこうはいかない…」

H Gは、愛銃をいとおし気に撫でる。そして、H Gの後をついてくる碓屋の面々に振り返り、

「みんな、今日の出来は日頃の訓練の賜物！上出来だ！！」

「ハイっ！！」

T T・H Y・I Y、・T Yの碓屋の社員（正確に言うとなら碓屋の社員ではないが、人手が足りないので手伝ってもらった）は嬉しそうに返事した。

●白山亭での慰労会

フェリー埠頭から白山亭に引き上げたH G一行。

白山亭の入り口の札を「本日貸し切り」にして、店内でH Gが入り口に立ち

「今日はご苦勞様、フェリーの中に色々残しているけど、警察から現場検証が終わらないと、引き上げられない…」

と言って、H Gは一息つくつと、

「…なので、積み残したご馳走を食べてしまおう！」

「「はーい」」

とこの時ばかりにいい返事をする。

「いーですねえ…」

と不意にH Gの後ろから聞かれた声がするので、H Gが驚いて声の主を見ると、Y Mが居た。

「あれ？Y M…任務は？」

「はい、大臣と大使はI F隊長に引き渡しまして、私達は任務完了です」

H Gが見るとY Mの後ろにはY Mの部下2名が居た。

「あーそう。それなら、一緒に食べていくといい」

「「はい、ありがとうございます」」

H GはY Mに優しく、

「今回は、大変だったね」

「助けていただきありがとうございます。先輩」

と言って、Y MはH Gに抱き着いた。

「よせよ…お前の旦那に殺されたくない」

とH Gは言った。Y MはF県領地の隣のS県領地に旦那と子供がいる。旦那はS県領地の地警の警部補である。

「あら、Y M久しぶりー」

とT Tが言うと、Y Mも

「T T、久しぶりー」

とお互い少しかがんで体を互いに反対に傾け、小さく手を振りあう。H Gは勝手に「オバハ

ンの挨拶」と言っている。

「それじゃ、皆グラス持ったね？」

「「ハイ」」

「では、本日の作戦の無事終了を祝して、乾杯！」

「「カンパ——イ」」

皆一斉に料理に群がる…「若い娘は、酒より食べ物か…」とHGはその光景を見ながらビールを飲む。そこに料理とビールを持ったYMが来てHGの横に座ると「はい、先輩の分」と言つて、料理が盛られた皿を出す。

「やあ、ありがとう…ところで、YM達は今晚泊まる場所決めてんの？」

「いいえ…それがまだ…本部宿舎に泊めてもらおうかと」

「だったら、うちに泊まりな。部屋もあるし風呂も入りたい放題」

「そうですか…お言葉に甘えちゃお。あなたたちも(YMの部下達)お言葉に甘えましょ」

「ありがとうございます准尉」「准尉お世話になります」

「私も今夜は泊まっていこうかなあ…」

TTも言い出す。

「旦那が許可すれば、泊って行ってもいいぞTT」

「やったー、後でYMから准尉の学生時代の黒歴史を教えて貰お」

TTがほほ笑んで手を組んで肩の辺りに当て首を傾げると、YMが応じた。

「いいですよー」

HGは二人のやり取りに、

「んだとー」

食事も進み、酒も進む…HGは「こりゃいけるなあ…」と積み残した料理を食べていた。

ふとHGの隣に座っていたYMがHGに寄りかかる。HGがYMを見るとYMもHGを見つめていた。YMは酔っていた。「人質から開放されて、安心したんだな」とHGは思った。

「YM…」

「はい、先輩」

「今回は散々な目にあったね」

「ええ…本当に…」

「怖くなかったか？」

「怖かったです…」

「この任務を発注したのはあのOJ少尉だ…奴も近々この店に来るといふから、文句を行ってやる」

「先輩―！頼もしいです」

YMがHGに擦り寄る。

「あつ、先輩！」

「なんだ？」

「IF隊長から聞きましたが、先輩が私の事を思って心配していたと…この作戦は先輩が考えたそうですね…また先輩の采配を見ることができて嬉しいですよ」

「へたすりゃ、お前さんを人質に乗っ取り犯はおろか、あの狸と貉を逃がすリスクがあつたけど…ゆるせYM」とHGは心の中で詫びた。

宴も進み、HG以外は酔いが回ってきた。(HGはこういう場合、後片付けをするので、

あまり飲みません。作者注)

「先輩…」

「なんだ」

「なんだか、学生時代のサークルのコンパ思い出しますね」

「そうかね」

「F県領地の山奥の温泉での合宿とか…」

「あったなあ…アッ！」

H Gはふと思い出した。

「どうしました？」

Y Mが真顔になって聞く。

「そういえば、この前のF県領地の事件中にあの温泉宿行ったわ…」

「ホントですか？先輩」

「うん、市街地で爆発騒ぎがあった後、市街地から一緒に逃げてきたT TとH Y連れて…そうか…なんで思い出さなかったんだろう…あの時ドライブインで何気にこの先に温泉宿があると行ったのは、学生時代に合宿で行った時の記憶か！」

「あの時の、温泉宿ですかあ？」

いつの間に、T Tがビール瓶を持ってやってきていた。

「へえー、あの温泉宿、准尉とY Mの思い出の地なんだー羨ましい…で、どうだったの？ Y M？」

それを聞いてH GとY Mは「(あつ、こいつ話を半分しか聞いてないな…)」と思った。

「…その頃、私はO県領地に行っていました…」

酔っ払ったI YがH Gの後ろからのしかかる。H Gは「ワッ！」と驚いた。

H YとT Yは何故か二人して酒を酌み交わしながら、H Gを睨んでいた。

「うふふ、先輩もてますね！」

「なにを言う」

その後、任務を完了したI Fが部下達と「あたし達も積み残したご馳走よこしなさい！」と白山亭に押しかけて来た。

Y Mに聞いたら、「I F隊長にこの事（白山亭での慰労会）を教えちゃいました…」と舌を出して言った。それを聞いて「（本当に女子のコミュニティー…半端ねえ）」と思った。

救出された人気歌手I Mは、無事海浜アリーナでのツアー公演を終え、次のツアー会場に向かう前に、お礼として、白山亭を訪れてミニコンサートを行った。そこには、協力をしてくれた港湾局、港町水上警察署ならびに港町警察署の人達も招いた。

●O J少尉来店

「やあ、H G白山亭開店おめでとう」

フェリー埠頭の事件の数日後、白山亭の入り口を開けて、バーカウンターでコーヒーを淹れているH Gを見つけたO J少尉は入り口での女給の案内を無視してバーカウンターに向かい、手を上げ言った。

「やあ、O J少尉いらっしやいませ…この席にどうぞ、なにか飲みます？」

H Gも応じる。

O J少尉は席に座り、H Gが提示したメニューを見てH Gに白山亭オリジナルコーヒーを注文した。

「この度は、散々だったね。無事事件解決おめでとう…そしてご苦労様です」

O J少尉の言葉に「(誰のせいだ!)」と突っ込みを入れていた。

「…はい、おかげさまで…Y Mは人質に取られるは、人気歌手I Mさんの警護任務の契約に人質奪還任務が追加されるわで…」

とH Gはわざとらしく言うと、

「Y M君の件は、本当に申し訳ない…無事に彼女を解放したことに中佐(A T…O J少尉の上官)も大変感謝している。それから人気歌手I Mさんがあのフェリーに乗船していたことは災難だった。どこで調べたか知らないが、彼女の芸能事務所の社長から抗議の電話があったと、基地から通知が来た。中佐が直接誤りに行っているよ」

H Gは「(芸能事務所の社長に教えたのは俺だ)」と心の中で舌を出していた。

「中佐直々に?この護送計画の責任者はO J少尉…お前さんじゃないの?」

「…うん…確かに私だけど、護送計画を承認して、あの日帝都の軍令部に報告するために駆逐艦でフェリーを追って帝都に向かったのは中佐自らの意志と言う事で…『私が責任を取って、芸能事務所の社長に誤りに行くから、少尉(O J)、君はそのままH G君の店に行き今回の件について詫びてきなさい』と…」

「…中佐、凄いな!」

O 県領地の海軍基地でF 県領地の事件について話したときに、懐の深さを感じていたが、部下の失態を庇ってくれるなんて…そこまで責任感が強いんだ…却って芸能事務所にO J少尉の事を教えたことについてA T中佐に申し訳ないとH Gは思った。

「うーん、そうでないよ。中佐はI Mさんのファンだし、あの芸能事務所のアイドルユニット△△は中佐の娘共々ファンだし…案外、サイン貰って居たりして…そういうお茶目もするお人なので」

「中佐—!」

H Gが呆れて言うと、O J少尉とH Gは互いにカウンター越しにお互いを指さして、

「でも、部下思いの尊敬できる上司」

と同時に言って笑った。

「なので、これは中佐から…そして、これは私から、開店祝い…とお詫び」

と言って、O J少尉は足元の紙袋を2つバーカウンターの上に置いた。

「ありがとうO J少尉」

「T T休憩から戻りました…あら准尉、この方は？」

バーカウンターに入ったT Tが、H Gの前に居るO J少尉に対して質問した。

「この人が、かのO県領地海軍基地のO J少尉」

H GがO J少尉を紹介すると、T Tは「この人がO J少尉さん…」とスラッとした格好の良い、そしてハンサムな人物に改めて興味を示した。

「始めまして、O Jと言います…あなたはH Gの奥様でいらっしゃいますか？」

「…あら…やだあ…奥様だなんて…」

T TはO J少尉を見て、ときめいてしまった。H GはT Tの舞い上がっているのを見て「(さもありなん…長身のT Tと並んだらお似合いのカップルだ…)」と思った。

H Gが軽く咳払いすると、T Tは我に返り、

「あつ、私はT Tと申しまして、ここの従業員です」

「そうでしたか…お美しいので、てっきりH Gの奥様かと…失礼しました」

「いえいえ…よく間違われるので…大丈夫ですよ」とT Tが言うと、「(オイオイ!)」とH GはT Tに突っ込みを入れた。

T TがO J少尉の言葉にすっかり参り、浮かれているので、H Gは「(やっぱり、O J少尉のルックスでは…奴は女たらしだな…)」と思った。

「…そういえば、今こちらの彼女は君の事を『准尉』と呼んでいるけど…Y M君も確か君

の事を「先輩」と呼んでいたけど…」

「ああ…それは、私の前に居た会社での渾名だよ。社外で軍と業務する場合に使う待遇階級からね…YMが俺の事を「先輩」と呼んでいるのは、彼女は大学の後輩でもあるのでね」

「そうか…じゃ、君の民兵会社時代は、尉官待遇なんだ…いや、なにSR大尉が君の事で『あいつ、軍士官学校に行った経験があるじゃないか?』と言っていたものでね」

「ハハハ、私の正規陸軍時代の最終階級は「上級曹長」…軍士官学校には行っていないよ。OJ少尉、君みたいに軍士官学校で勉強できたら、よかったのと思う事がよくあるよ。帰ったら、SR大尉によく言っておいて」

「ふふっ、わかったよHG」

「OJ少尉…君が羨ましいよ」

HGは民兵会社時代…退職してもF県領地の事件（「巻き込まれ親父の撤退」「巻き込まれ親父の反撃」参照）で日和見保身内密主義の上層部に嫌な目に遭っていたのを思い出していた。

「そうかね？」

「AT中佐の様な良い上司の元で働けるんだから」

「私は、基地で中佐やSR大尉を向こうに、駆け引きできる君の方が羨ましくおもうがね」

OJ少尉の言葉にHGは「（あいつら（日和見保身内密主義の上層部）とやり合っている内に身についたのだが…）」と思った。

それを見ていたTT「私達にとっては、あなたがいい上司ですよHG」と思った。

●結果オーライと言う事にして

「それはそうと…」

OJ少尉は1枚のメモを取り出した。

「なに？」

「フェリーの乗っ取り犯についての報告だ」

「どれどれ…おっとその前に…H Y、T Y、I Y！」

H Gはバーカウンターからフロアで給仕している3人を呼んだ

「「「ハイ」」」

呼ばれた3人がバーカウンターに来ると、

「O J少尉紹介するよ、今回のフェリー事件…とF県領地の事件にも共に働いた、私の娘ども…そして、隣に居る彼女もだが…」

「I Yです」「…T Yです」「あつ…H Yです」

最初に挨拶したI Yがスカートを持って挨拶したので、後の2人は慌てた。それを見てO J少尉とT Tが吹き出しそうになった。

「初めまして、O県領地海軍基地情報課少尉のO Jです。H G、この娘達って？」

「F県領地の事件の時は民兵会社D Kの社員で、その後、エージェント派遣の会社を興したら私についてくれた娘達だ…で、今回のフェリー事件にも関わっている」

「へっ？エージェントの会社？…確か君はこの喫茶店とガンスミスを、民兵会社を定年退職してから始めて、それで対テロの強化ゴム弾について仕入れ元について聞かれたことはあったけど…」

「そうだよ…我々…いや、この娘達はこの店（白山亭）ともう一つの稼業である“碓屋”と言うガンスミスとエージェント派遣会社の社員なんだ…」

とH Gが言うと、O J少尉は目を点にして

「多角的に経営を始めたんだね…」

「まあね」

「それにしても、君達F県領地の事件に参加したんだ…」

「はい」

「彼女達も聞く権利があると思って呼んだ…辛い皆フロアに居てよかったよ」

「そうだね…彼女達も聞く権利があるね。では改めてこの度のフェリーの乗っ取り犯についての報告をしよう…」

と言って、OJ少尉はメモを読みだした。

「まず逮捕された乗っ取り犯は全部で9人」

「9人…やはり乗っ取り犯は大使を連れて帰るつもりだったんだ！…と、言う事はOJ少尉、君が追っていた潜水艦は迎えか！」

「そうだね、乗っ取り犯の話ではF県領地のフェリー埠頭から乗船して大使を連れて潜水艦で本国に帰る計画だったそうだ」

「それで、9人…大使を入れれば、潜水艦の定員ですね…その場合、大臣は見捨てられますね」

とHYが訊ねると、HGが「そうだね」と言って頷く、OJ少尉は話を続けた

「迎えの潜水艦は私と中佐が乗船した駆逐艦に発見され、我が国領海外に逃走…そこで追跡を諦めた。潜水艦が迎えに来ないと連絡が取れないので、潜水艦で脱出するのは諦めてフェリーを乗っ取り本国に帰る作戦に変更したが、操舵室に行ったら、フェリーは自動航行で航行していたので、この計画も失敗…何もできないままY国際港のフェリー埠頭まで連れてこられたので、次の脱出計画を考えていたら、君たちに制圧された…」

と言うと、HGは驚いて、

「エッ？フェリー埠頭に着いた後の行動を考えてなかった？」

「そう…最初の計画が頓挫した後の事は考えていなかったらしい…」

「へえー、じゃ逆におとなしく大使を渡して潜水艦で帰ってもらったら、一見何事もなくフェリーは埠頭に接岸して居るってこと？YMも何事…でもなくはないけど…大使逃がして

軍から叱られるけど、怖い目に合わずに済んだよね、俺達もあんな事しなくて済んだよね？」

「…うつ、うんそうなる…けど、大臣はともかく、大使を逃がしたら軍の沽券に関わる」

O J少尉はH Gの剣幕気味の抗議にタジタジとなった。

「沽券も保険もあるものか」

とH GはO J少尉に言った。

H Gは気を取り直し、

「…そういえば、乗っ取り犯はF県領地からフェリーに乗ったと言う事だけど、F県領地には、まだC国の反政府組織の工作員が潜伏していると言う事か…」

「私もそう思う、なので中佐が軍令部にF県領地の正規陸軍に対して憲兵隊による一層の査察とF県領地のC国の反政府組織の殲滅を談判する為に、この度私に同行したのもこつちに来る理由の一つ…」

「やっぱり、良い上司だね」

「そうだね」

「まっ、まあ結果オーライと言う事で…」

「O J少尉！君がいうかぁ…まあ、あの事件で我が社はエージェント派遣業務最初の仕事で人気歌手I Mさんの救出と言う当初の依頼以上の仕事をして、一躍名を上げることができたし、この店も商店街も人が戻ってきて繁盛しているし…」

「そうなんだ…」

「しかしなんか、嫌な処でつながるね…この町の商店街の会長が私の親戚でね、I Mさんが所属する芸能事務所の社長と知り合いだそうで、最初は、ここの海浜アリーナのコンサート中の警護を依頼されたんだ…その理由が、この脅迫文…実は…大きな声では言えないが…

人気歌手IMさんのここ（海浜アリーナ）でのツアー中にツアー会場の爆破予告があつても、結果何事もなく、IMさんは次のコンサート会場の帝都に向かったけど…」

「ナニ！」

「OJ少尉！…シー」

「あつ、ゴメン」

HGはスマートフォンを取り出すと、1枚の画像をOJ少尉に見せた。そこにはHGがIMの所属する芸能事務所に仕事の打ち合わせに行ったときに、その社長から見せてもらった脅迫文が写っていた。

『○月××日××△日に海浜アリーナで行われるIMのコンサートを取りやめろ、コンサート会場を爆破する』

それを見たOJ少尉…

「うわー、本物を見た！」

と言って、驚いた。

「実は、この脅迫文についても報告がある」

「エッ」

「乗っ取り犯を取り調べている最中に犯人の一人が言った話なんだが…大使を護送中に奪還する計画を練っている最中に、大臣と大使が乗船するフェリーに人気歌手IMさんが乗船する事を知った犯人の一人がIMさんの熱烈なファンであつたため、なんとか彼女を自分達が起こす騒動に巻き込まれないようにするために、彼女の所属する芸能事務所に脅迫文を送ったそうだ…」

HGはそれを聞いて、

「…だからか…コンサート中に何も起こらなかったのは…それにしても、芸能事務所は自分達の稼ぎを優先して、人気歌手IMの事を思ってくれている熱烈なファンからの警告を

無視したんだ…」

と言った。

「んで、この脅迫文から本来のIMさんの警護依頼がこの娘の初仕事」

と言って、HGはHYを指さした。

「…こんな可愛い少女が？」

と言ってOJ少尉はHYの顔を覗き込む。小柄で童顔のHYの顔がOJ少尉の『可愛い少女』に反応して笑顔になる…HYはどっかでやり取りした様な…と思っているがOJ少尉のハンスム顔がほほ笑んでいるので悪い気がしなかった。TY、IYの二人は嫉妬した。

「そうだよ、彼女はウチのナンバー1」

とHG言うと、HYは喜んだ。

「へえー、そうなんだね。こんな可愛い娘達に囲まれて羨ましいよHG…でも、民兵会社ではなく、独立してエージェント派遣会社と言う事は、彼女達も銃を？」

「うん、使える…みんな、OJ少尉に特別銃器携帯・使用許可証を見せてあげて」

IYとTYは

「ハイ!」「はい」

と返事したが、HYは

「えー」

HGの言葉に嫌な顔をした。HYは事件前の芸能事務所でのやり取りを思い出した。

IYとTYは素直に女給服のエプロンの下のポケットから特別銃器携帯・使用許可証を取り出してOJ少尉に見せる。OJ少尉は「よく頑張って取りましたね」とOJ少尉も所持しているので取得が大変な事は承知している。

一方HYがなかなか、特別銃器携帯・使用許可証を出さないので、HGが手で催促する。

仕方なくH Yは女給服のエプロンの下のポケットからパスケースを取り出し、特別銃器携帯・使用許可証をO J少尉に見せた。それを見たO J少尉

「…えっ、この娘40代…？」

O J少尉の目が点になった。H Yはすぐに提示した特別銃器携帯・使用許可証をしまい、「(またかよー)」とむくれてH Gを睨んだ。

●エピローグ

「F子ちゃん、そろそろ看板だよー」

「んなこと、あるかい(怒)。それにまだそんなに(酒)飲んでないし…(いや…相当呑んでいます(笑)作者)」

白山亭のバーカウンター越しのH GとI Fの会話。

最近I Fは帝都の家から、白山亭のバーカウンターに座って、H G相手にくだを巻いている。

「あたしも、もうすぐ定年で…」

「そうだねー」

「定年延長とか政府は言っているけど、会社の日和見保身内密主義の上層部とこの先やっていけないと考えるとね…」

「うんうん…分かる」

「だからあ…この先どうしていいのか不安になって…」

「なるほどー」

「F子ちゃん、飲んでるー？」

「私は、まだそんなに飲んでないし、酔ってません！」

「実家帰ったら？実家は有名な造り酒屋でしょ？」

「実家は、とうに弟が継いだわ」

「そーなん」

「だったら、俺と結婚するか？永久就職…なんてねえ」

珍しくI Fに対してシリアスに言ったH Gだが、

「なっ…なにを馬鹿な事言ってるの！！」

I FはH Gの話を酔っている赤ら顔からさらに真っ赤になって否定した。H Gは「（また振られたか…）」と思った。

「巻き込まれ親父の突入 Ⅱ完Ⅱ」